



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

夜の花

子供の頃からとっても気になる花がある。それは最初、沖縄の親戚が持って来て、「大阪じゃ咲かないかもしれないけど、まあ咲いたら奇麗だから」と置いていった一枚の葉だった。子供心に「花ちゃん、葉っぱちゃん」と不思議に思った。

母はその葉っぱをたいそう喜び、植木鉢に差し込んだ。そんなことで花が咲くわけがない！ と私はますます不思議に見ていた。うちの母は「花咲かババア」である。私が貰って来た植木鉢の花なども「蘭は難しいからなあ」とか言いつつ、何度も満開に咲かせる。道に咲いてるよ

うな花をひよいつと取ってきて、庭中に群生させたこともある。「花咲かす術の使える魔女なんか？」と思うほどだ。

そんな彼女が喜んだ葉っぱ。それは「月下美人」と呼ばれる花だった。サボテンの一種らしいが、咲くと子供の顔くらいまで大きくなる南洋植物で、えもいわれぬいい香りを放つ。そして悲しい事に夕方から咲き始めて、一夜で萎れて落ちてしまうのである。だから月下美人と言われている。

なんと儂い花ではないか。南の島の月の下、神々しく咲く白い花、それがあの葉っぱの正体だったのだ。私はその話を聞いただけで、あまりのロマンチックさにうっとりしたものだ。大阪のど真ん中で育ったので、自然に対してそういう気持ちになったのは初めてだったかもしれない。

とはいえ、それは想像でしかない。大阪の気候じゃ無理だろうと沖縄の親戚のおじさんが言ったとおり、葉っぱはなかなか根がつかず、さす

がの母でも苦勞をしていた。

それでも何年かすると、葉っぱが植木鉢一杯に広がるサボテンのようなものに育っていった。そしてある日、ついに葉っぱの真ん中から何かが生えてきたのである。その時、私は月下美人が茎から咲くのではなく、いきなり葉っぱからぶら下がるように咲くのだと知って、これまたカルチャーショックを覚えた。

最初に咲いたのを見たのは小学校の低学年の時だった。まだ昭和四十年代の最初の頃である。家中が狂喜して、近所の人も巻き込んで一晩中起きて眺めていた。

「奇麗やなあ」

「ほんなやなあ」

下町のおっさんも、おばちゃんも、子供達みんなが同じように感動するほど美しかった。次の年になってまた咲いた時は、新聞から取材が来

て小さな記事に載った。それほど大阪で月下美人を見ることは貴重だったのだ。

母はその後魔女ぶりを発揮し、一度に七つもの花を咲かせた年もあった。恐ろしい…いや、素敵な人である。そして今年も昨日ひとつ咲いた。まさしく雪のように真っ白で、ちようどうちに居た劇団のメンバーが、「これが月下美人かあ」と感動してそれぞれ携帯に収めて帰って行った。今回の写真が今年の月下美人である。夜の2時くらいの映像なので少し萎みかけているが、美しさは伝わることだろうと思う。ご堪能あれ。

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
